

聖書:ダニエル書10章15節~11章1節

説教:安心せよ。強くあれ。強くあれ。

はじめに

バビロンに連れて行かれたダニエルは、あらゆる知恵に秀で、洞察力に富み、おまけに幻と夢を解き明かす賜物まで待った人でしたから、すぐに宮廷に召し抱えられ、王の絶大な信頼を得て、大臣の位にまで上り詰め、人の目から見ると成功した人生を歩んでいきます。けれども見えないところとなると、簡単に結論づけることはできません。彼は、エルサレムを去る日からずっと破壊された神殿のことに心を痛めていました。主よ、いつ神殿を再建して下さるのですかと祈ります。ところが、まったく手ごたえがないまま年月が流れ、やっと神殿が再建はまもなく始まるのを知ったときは、彼は既に八十歳になっていた。それから間もなく、キュロス王がペルシア帝国の王座に就き、バビロンに在住のユダヤ人は帰国しても良いとのおふれを出すわけですが、ダニエルは帰れるような体力はありません。おまけに家族も亡くしてしまう。自分の国に帰りたい。そして神殿を再建したい。ずっと祈り願い、チャンスがやって来たのに、道は次々と閉ざされていく。深い絶望感に襲われて神に祈ったとき、主は幻のうちに現れてくださる。そうしたらダニエルは気を失ってしまった。これはいったいどういうことか。今日は「礼拝」という視点でその続きを見ていきます。

## 1 神と人との出会い

### 1) 倒れるダニエル

私たちは今神の前に招かれて、まさに礼拝を献げています。礼拝に来るのが恐ろしいと思う方はこの中にはいないと思います。そもそも恐ろしいと感じる方は、最初から礼拝に来ません。振り返れば、私もかつて神を信じる前は恐ろしいと思っていました。何か心の奥底にある悪い考えや人に言えないことを暴かれてしまうのではないか。あとでそれは罪と呼ばれるものであることを知ったわけですが、とにかくそういうものに触れられてしまうことが恐ろしい。それで、妻から何度も教会に誘われても、「私は無神論者だから」と言ってごまかし、逃げていた。

ダニエルはどうであったのか。日に三度祈りを欠かさず、主に信頼し続けたすばらしい信仰者でした。そんなダニエルが幻の中で主に出会ったわけですから、さぞかし喜んで主を礼拝したに違いな

い、と思うのですが、ここを読むとまったく反対です。幻のうちに現れた方を見て、力が抜けて顔が真っ青になり、ぱったりと倒れてしまいます。

これを礼拝という視点から見ると、大変恐ろしい事実が分かってくる。ダニエルでさえも、神に出会うことはいのちがけであったのですから、まして私たちが礼拝の場に招かれて、さあこれから神さまにお会いしましょうと言ったら、実は死ぬかもしれない。本来、礼拝とはそれほど危険なところであったということになる。

### 2) なぜ礼拝は安全なのか

礼拝は危険な行為と聞き、驚かれたでしょうか。なぜなら、礼拝に出て居心地が良いとか、眠くなったとか思うことはあっても、恐ろしいと感じることがほとんどないからです。この極端な違いはどうして生じるのか。

三つ理由が考えられる。一つ目。神がここにおられない。だから怖くない。でももし本当に神がいないならば、皆さんは来るところを間違ったということになる。間違ったのか、正しいのか、それは皆さんでご判断ください。

二つ目。神が御臨在しているけれど、自分の罪を自覚していないので怖いと思わない。三つ目。神が確かに臨在しておられ、そして自分の罪も自覚している。それでも恐れずに神の前に出られるのは、何か特別な仕掛けがあるから。そのまま神の前に直接出てしまったなら、罪に汚れた私たちは神の聖さの光に焼き尽くされるはずなのに、死ぬことがないように私たちを守る仕掛けがある。それがあるので私たちは安心して父なる神を礼拝することができる。いったいその仕掛けとはなにか。次にそのことを見ましょう。この安全システムは一つではありません。いのちに関わることから、安全のためにきちんと二重になっています。

### 2 礼拝の中で働く二つの安全システム

#### 1) 罪の赦し

ダニエルの場合もよく見ると、この安全システムが働いています。具体的に見ていきましょう。ダニエルがうつむいて黙ってしまったとき、人のような姿をした方が唇に触れてくださいます。なぜダニエルはうつむいて、黙ってしまったのか。そして、なぜ主はダニエルの唇に触れてくださるのか。不思議に思うかもしれません。このことを考えるとき、

預言者イザヤのことを思い起こします。彼は主を直接見たとき、こう叫びました。「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる」と言って死を覚悟するのですが、セラフィムが祭壇の上に置かれていた燃えさかる炭火をもってイザヤの唇が触れたとき、こう宣言する。「見よ。これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された。」(イザヤ書6章7節)

イザヤは主を見たとき真っ先に唇が汚れたものであることを自覚しました。ダニエルも同じです。だから何も語るができず、うつむくしかありません。けれども、イザヤの唇を聖め、罪を赦すために炭火が唇に触れられたように、ダニエルにも主の手が唇に触れることによって、罪が赦される。罪が赦されたのですから、きよくされたということです。きよくされた者は、もう死ぬことはありません。ですから安心して主の前に出ることができ。私たちも、この方が罪を赦してくださいと信じているので、安心して主の前に出ることができ。これが安全システムの一つ目です。

## 2) 聖霊の励まし

唇に触れられたダニエルはいったんは語り出しますが、なおまだ元気がない。それで主はもう一度ダニエルに触れてくださり、こう語る。「特別に愛されている人よ、恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」そこで初めてダニエルは、「わが主よ。お話してください」と言って、主の御声を聞く態勢を整えていきます。

私たちはどうでしょうか。主はいまは父なる神の右の座におられる。ですから、主の手が直接私たちの体に触れてくださることはないはず。でもこんな証しを聞くことがあります。「試練にあってもっともつらいとき、祈っていると主が私に触れてくださり慰めてくださった。」これは、たんなる錯覚とか、思い込みということでしょうか。決してそうではない。イエス・キリストが天に上げられるとき、なんと言われたか。「見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。」(ルカの福音書24章49節前半)

「父の約束」とは聖霊のことです。その聖霊が私たちのうちに住んでくださり、内側から私たちを励まして「安心せよ。強くあれ。強くあれ」と励まし、主を思い起こさせてくださる。二つ目がこれです。罪の赦しと聖霊の励まし、この二つの安全システムが働いているので、皆さんは安心して礼拝の場に来ることができるのです。

## 3 主の戦い

### 1) 目に見えない世界

では、このようにして力をいただいたダニエルに主は何を語つのか。最後にそのことを確認します。20節から11章1節。「私がなぜあなたのところに来たか、知っているか。今、私はペルシアの君と戦うために帰って行く。私が去ると、見よ、ギリシアの君がやって来る。しかし、真理の書に記されていることを、あなたに知らせよう。私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはいない。私はその彼を強くし、力づけるために、メディア人ダレイオスの元年に立ち上がった。」

ここで「ペルシアの君と戦うために」とあるけれど、神が槍とか戦車や弓を持ちだして、実際に戦争をするわけではない。そうではなくて、目に見えない霊的な世界での戦いのことを言っている。それは20節後半で、「見よ。ギリシアの君がやって来る」と言っていることにも関連します。いったい誰のことか。ダニエルの時代からおよそ二百年後にアレクサンダー大王が出て来てペルシヤを倒し、ギリシアが覇権を握っていく。おそらくそのことを指すと言われます。私たちの目にはギリシアの影も形も見えないような時に、数百年後に起こることのために神は準備をしていく。

### 2) 誰と戦っているのか

では今はどうなのでしょう。なお主は、目には見えないところで戦いをしておられると見るべきです。いったい誰と戦っているのか。パウロがエペソ人への手紙2章1、2節でこう書いています。

「さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」

空中の権威を持つ支配者、不従順の子らに今も働いている霊。それらの霊にかつて私たちも従って歩んでいた。パウロはそう語っています。主が戦っておられる相手とはこれです。いったい何者なのか。具体的に言った方がいいでしょう。

### 3) 真理の書に記されている

新型コロナウイルスの感染が広がっていったとき、岩手県が最後まで感染者ゼロでした。しかし最初の感染者が出ると個人情報が出て、バッシングが始まったのだそうです。普段は穏やかな人たち

なのに、聞くに堪えないようなことばをネット上で書き連ねていく。一人だけではない。集団でバッシングをする。やがてこれが国全体に広がる時、ついには戦争さえ起こしていく。そんな歴史を見てきました。どうしてこうなるのでしょうか。誰かのせいなのか。聖書では、空中の権威を持つ支配者がいるのだと指摘する。どこにいるのか。いま一部で陰謀論が流行っているようですが、それとはまったく違う。何かの組織ではない。見えない働きです。見えないけれど、実際に私たちの罪に働きかけ、不安を募らせ、互いに憎み合い、ついには互いに殺し合うようにさせていく。それほど力を持っている。私たちが勝てる相手ではありません。主が戦う。この戦いの結末については、真理の書に記されているとおりに、主の勝利で終わることはすでに決まっています。

「安心せよ」と言われるのはそのこともあつてのことです。私たちのために戦っておられる主をいま安心して礼拝できる。その恵みを改めて覚えたいと願います。